


3. 起業


今治のタオルはわしが守る

㈱三光産業は、業界不況でタオル製造業者が少しずつ減少していった1983年に産声をあげた。中古の坂本式(遠州織機)ジャカード機6台を他の工場から買い上げてタオル工場を開業



㈱三光産業の工場

し、1984年に株式会社に改組した。このとき尾崎氏は53歳であった。会社創設にあたっては、村上政道  氏の心づよい後押しがあったが、周りのみなは反対した。しかし、「今治の伝統産業はわしが守っていかないかん」という心意気で起業を決意した。名前の由来は、地球を照らす3つの光(太陽、月、星)から名付けられた。

当時のジャカード自動織機が300~400万円くらいしたが、事業をたたむ同業者からタダ同然で買い上げたので5~6万円で入手できた。織機の取付けにはお正月の休みにもかかわらず、技能士研究会のメンバー10人程度が「手伝ってやるけん、どがにするんぞ」と言って手伝いに来てくれた。会社創設当初は、なかなか経営がうまくいかず何度もくじけそうになったが、「妻や家族を悲しませるわけにはいかない、協力してくれた仲間にしんない」という思いからなんとか踏ん張った。少しずつ会社経営も軌道に乗りだし、さらに技術開発にも成果がではじめた。1994年、[タオルのパイル抜け防止組織](#)  の開発に成功し、1997年に愛媛県知事賞、1999年には労働大臣賞(現代の名工)を受賞した。

1990年代半ば以降、タオル不況のあおりをうけて海外に工場を移転する企業も現れるなか、三光産業は「純国産」にこだわり、100%受注生産で整経と製織のみをおこなった。会社の主力製品は、国内向け浴巾であり、従業員は家族のみの小規模経営であった。家

族経営ながら、シャーリングなど独自の技術を武器にして順調に生産量を増やしていった。タオル製織におけるクラフト的技術とは、織機の微妙な調整加減にある。これによって他の会社には真似できない個性のあるタオルが製織される。通常鉄工所で生産された織機は部品で調達され、それを組立てるのも職人である技術者の仕事であったため、技術者は織機の組立から調整までをおこなっていた。「四国タオル技能士研究会」の発足以降、ある程度の製織技術が共通の知識として産地共有されるようになっていたが、これらの細かな技術はタオルメーカーにとって差別化を実現する重要な技術であった。

順調に歩んできた会社だったが、2007年に突然の危機が訪れた。1999年の労働大臣賞(現代の名工)と2003年の黄綬褒章の受賞を受けて、2007年7月7日の七夕の日に、四国タオル工業組合の組合員が発起人となって尾崎氏の祝賀会を市内にある今治国際ホテルで開く予定をしていた。その矢先の6月28日に、会社の主要取引先であった大阪のタオル専門問屋が民事再生を申請し倒産したのである。1億5千万円の未払いが生じ、会社は連鎖倒産寸前に追い込まれた。祝賀会は中止となり、あとは会社の倒産を待つばかりであった。そんなときタオル業界の仲間が「尾崎の会社は潰すなよ。今治の恥になる。」と言って、銀行に資金援助の願いを申し出てくれた。その結果、4つの銀行から融資を受け、倒産の危機を免れた。「純情でおひとよし、そんなわしを周りが助けてくれた」と、そのときのことを振り返るたびに、人によって生かされている自分を尾崎氏は痛感する。三光産業は、いまでもタオル製織の技術にこだわり、綿糸を1,000本以上使用し、綿糸をいかに平等にバランスよく扱うかに神経を注ぎながら、良質のタオルをつくっている。

2008年、尾崎夫妻は金婚式をむかえた。「一筋の糸に託したわが人生 重ねし苦勞の花は開いて」の詩が語っているように、タオルとともに生きた人生、最愛の妻である光子さんと、おなじ金婚式をむかえた天皇陛下に皇居へ招待され、祝福を受けた。

(次号につづく)

